

第9節 中原4号墳出土須恵器の様相

和田 達也

はじめに

中原4号墳では、玄室内から29点の須恵器が出土した。須恵器は、古墳の築造年代、埋葬の時期・回数を推し測る資料のひとつである。数多くの古墳から出土し、相対的な時期差の検討に用いられている。

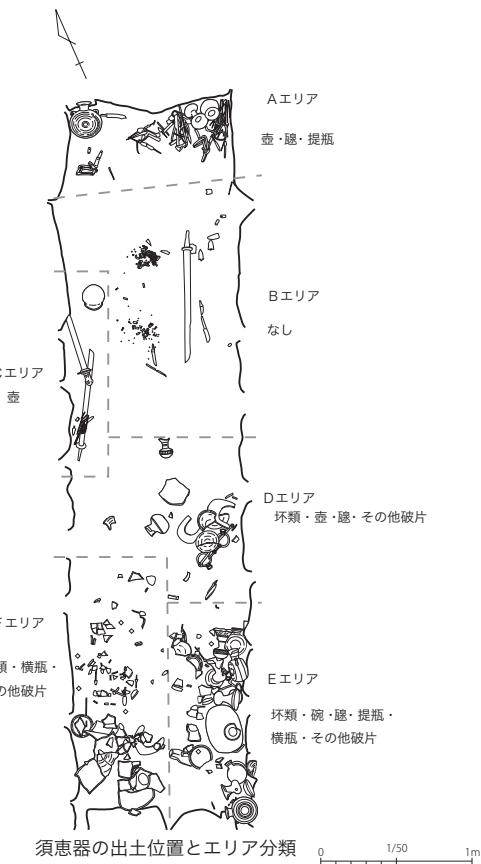
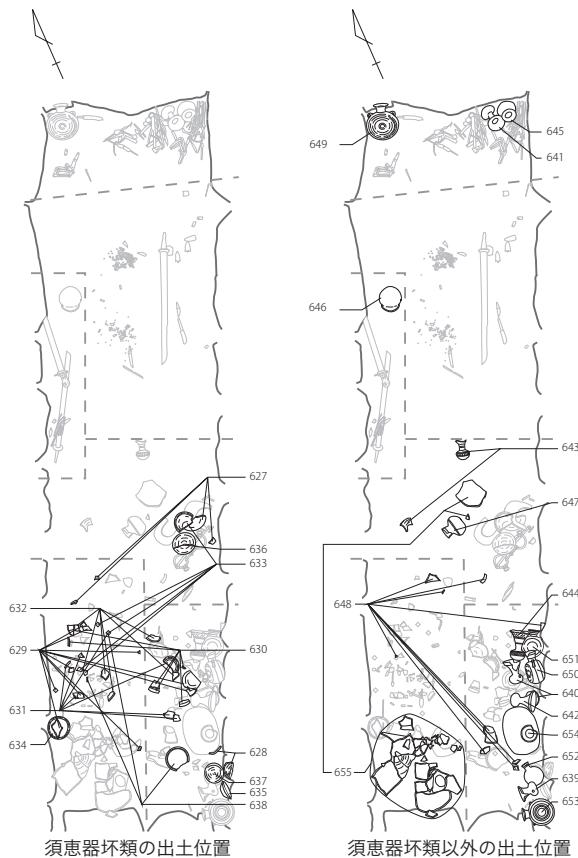
中原4号墳から出土した須恵器には、胎土や形態、調整技法などに多様性が認められ、時期や産地の異なるものが複数あるとみられる。また、副葬された須恵器のなかには追葬に伴い移動された資料や細片化した資料がみられ、複数回の葬送とそれに伴う行為があったと推定できる。

本稿では、須恵器の特徴から中原4号墳における初葬や追葬の時期について検討を行う。また、周辺古墳出土須恵器の特徴・構成と比較し、須恵器から見た中原4号墳の特徴について考察を行う。

1 須恵器の時期

静岡県内における古墳時代の須恵器の編年研究は、まとまった窯跡の調査事例があり資料数が確保されている県西部地方に所在する湖西窯跡群（湖西市）を中心に進められ、一定の成果が示されている。いっぽう、中原4号墳がする県中・東部地方では、生産地でのまとまった調査事例が少なく、編年をはじめとした須恵器に係わる研究は西部地方に比べ低調といえる。しかし、駿河西部地域の消費地の須恵器を素材に、流通構造の把握を試みた後藤の研究（後藤2000）は、湖西窯産須恵器を中心とした編年に偏った静岡県内の須恵器研究において示唆に富んだものと評価できる。なかでも、静岡県中部における生産地数の推定と須恵器の高壺や壇に地域色があることを指摘した点が注目できる。

中原4号墳出土の須恵器の生産時期を検討するにあ



第219図 石室内の須恵器出土状況と呼称

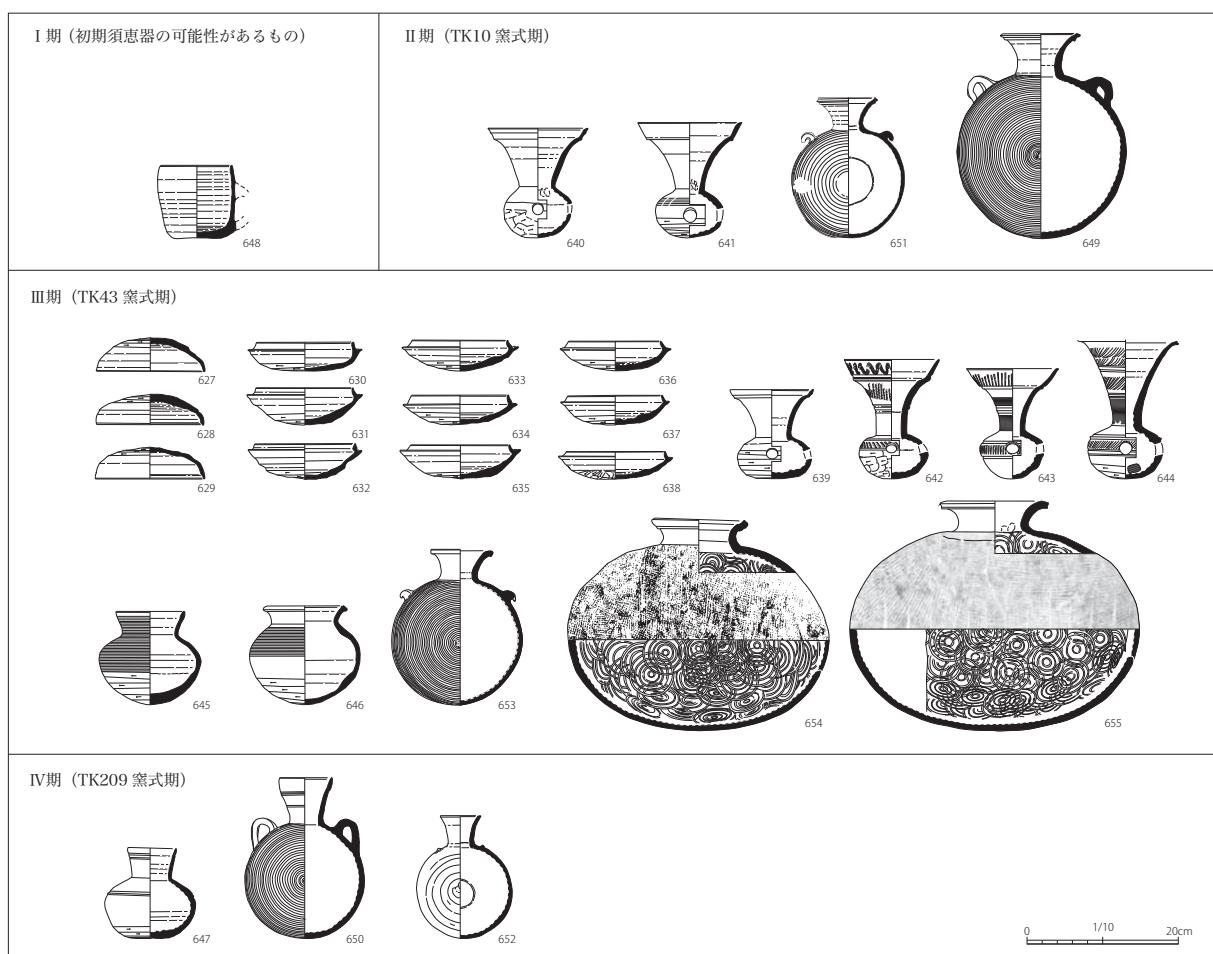
たり、在地産須恵器の編年を基準とすることが望ましい。しかし、駿河地域において有効な須恵器編年が構築できていないため、列島各地で広く用いられている陶邑編年（田辺 1981）に基づいて検討を行う。中原 4 号墳から出土した須恵器は、TK73～TK208 窯式期の可能性があるもの（I 期）、TK10 窯式期（II 期）、TK43 窯式期（III 期）、TK209 窯式期（IV 期）の 4 つの時期がある。

I 期 I 期の須恵器は、把手付碗（648）である。把手付碗は、一般的に須恵器生産開始時～TK23 窯式期までの間で生産が収束する器種である。器種や調整の特徴から TK73～TK23 窯式期に生産された可能性がある。いっぽうで、少なくとも 100 年以上伝世したと考えられる点や装飾を持たない単純な形態であり、口縁端部が丸く整えられている点から、在地窯で生産された可能性も否定できない。

II 期 II 期の須恵器として、頸（640・641）、提瓶（649・651）の 5 点がある。頸は頸部の長頸化の様相が認められるが、相対的に太く、口縁端部は凹面をもつものが多く

い。提瓶は、環状の把手が付くもの（649）と角状の把手が付くもの（651）がみられ、把手の顕著な形骸化は認められない。口縁部は外反し、口縁端部下方隆帯をもつ。これらの特徴から II 期の須恵器は TK10 窯式期に併行する時期に生産されたと捉えられる。

III 期 III 期の須恵器として、坏類（627～638）、壺（645・655）、頸（639・642～644）、提瓶（653）、横瓶（654・655）の 21 点がある。坏蓋は口径 14cm ほどのもので、口縁部と天井部の境には緩やかな段をもつものと滑らかに口縁部に至るものがある。口縁端部は内面に凹面をもつもの（628・629）と丸く整えるもの（627）が認められる。坏身は最大径が 14～16cm で、深身のものと浅身のものがある。口縁端部は丸く整えられている。坏身・坏蓋ともに天井部外面にはケズリ調整が器高の 1/3～1/5 程度まで施されている。頸（642～644）は、頸部が細くなり、口頸部高が胴部に対して長く、頸部には波状文や列点文、列線文が施されている。提瓶（653）は角状の把手をもつが、II 期の提瓶に比べ



第 220 図 中原 4 号墳出土須恵器の生産時期

角状の把手が小型であり、形骸化しているといえる。口頸部は外反するが、口縁端部は下方へとつまみ出された形態をしている。横瓶は胴部がほぼ左右均等な形態を呈し、口縁部は外反している。これらの特徴からⅢ期の須恵器はTK43 烟式期に生産されたものと比定できる。なお、壺(639)は体部が扁平化し、頸部が太い。地域色が顕著であり、TK43 烟式期以降に生産されたものと捉えられる。出土状況を踏まえ、Ⅲ期と推定できる。

IV期 IV期の須恵器として、壺(647)、提瓶(650・652)の3点がある。いずれの個体も口縁部が直立するものである。また、提瓶(652)は小型化が顕著で、把手の形態は形骸化が進行し浮文状を呈している。これらのことからIV期の須恵器は、TK209 烟式期に生産されたと捉えられる。

2 造営時期と諸行為の時期

4号墳から出土した須恵器の時期と使用痕跡・出土状態の相関性について分析を行い、4号墳の造営時期と葬送儀礼の回数について検討を行う。

(1) 須恵器の生産時期と使用痕跡・出土状態の相関性

I期 把手付碗(648)はD・E・Fエリアから小片の状態で出土した。把手は出土しておらず、副葬前に塊部と離れていたと考えられる。顕著な使用痕跡はみられず、破断面にも摩滅・摩耗はみられない。把手が欠損した状態で持ち込まれたと推定できる。

II期 壺(641)と提瓶(649)がAエリア、壺(640)と提瓶(651)がEエリアから出土した。いずれの壺も底部外面が滑らかになっており、注口部には欠損や摩耗が認められる。提瓶(651)は、口縁部を上に向けた際に下側となる部分に摩耗がみられる。649では、明確な使用痕や欠損は認められなかった。II期と捉えられる遺物はいずれも床面に接した状態で出土している。

III期 坏類はD・E・Fエリアから出土した。坏類の口縁端部には弱い摩耗がみられるものがみられる。摩耗

がみられるのは、627・630・633・635・636・638である。床に接した状態で627・629～634、床からやや浮いた状態で636、床面から浮いた状態で628・635・637が出土した。

壺は、Dから643、Eから639・642・643が出土した。643の注口部には欠けがみられる。

壺は、Aから645、Cから646いずれもほぼ完形の状態である。646の底部と口縁端部が滑らかになっており使用痕跡がみられる。

提瓶は、653がEエリアから完形の状態で出土した。側壁に乗るような状態で出土しており、床面から10cm程度高い位置からであることから、原位置を保つものではない。口縁部に摩耗が認められる。

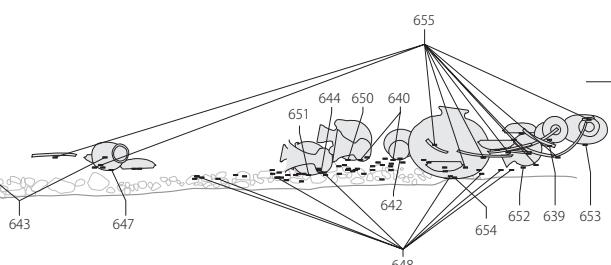
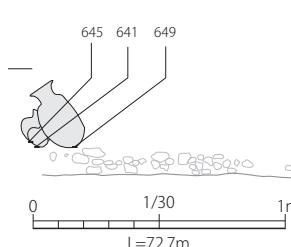
横瓶は、Eから654が完形の状態で出土し、D・Fから655が割れた状態で出土した。655の破片は床面から浮いた状態で出土している。使用痕は認められない。

IV期 壺(647)はDエリア、提瓶(650・652)はEエリアからほぼ完形の状態で床面から少し浮いた状況で出土した。口縁部には欠けや摩耗がみられる。650・652には使用痕跡がみられない。

(2) 埋葬行為(儀礼)の時期と回数

初葬の時期 床面に接する状態で出土した須恵器は、I～III期に生産されたものに限られ、初葬の時期はIII期(TK43 烟式期)を中心とした時期といえる。初葬時に副葬された可能性が高い床面直上から出土したものにも使用痕跡が認められ、使用していたものを石室に納めたと捉えられる。

追葬の時期 IV期に生産されたと捉えられるものは玄室の床面からやや浮いた状態で出土しており、追葬に伴うものと捉えられる。III期に生産されたものの中にも床面から浮いた位置で出土したものもあり、追葬に伴い搬入された可能性もある。須恵器の形態差や出土状況からは、初葬後、2回以上の追葬などの行為が行われたと想定できる。



第221図 須恵器(壺以外)の出土高

3 副葬された須恵器の多様性

I～III期に生産された須恵器の多くは初葬時に、石室内に持ち込まれたと捉えられる。中原4号墳に副葬された須恵器の各器種には複数の個体の副葬が認められるものの、同一器種において同じ形態をしたものはみられない。胎土や焼成雰囲気にも多様性が認められる。多様性を胎土と焼成雰囲気、同一器種における形態や調整の差異などに注目し、中原4号墳出土須恵器の多様性について分析を行う。

(1) 胎土の多様性

類型1 砂質で、0.5mmの白色粒子と黒色粒子を含む胎土をもつ。坏蓋(627)と坏身(631)の2点があり、天井部と底部の内面は5条程度のナデがみられる。坏身の受部内側はなめらかに立ち上がる。

類型2 粘質で、0.5mm～3mmの白色粒子、灰色粒を含む胎土で、黒色粒子は含まない。坏身(633)の1点がこの類型にあたり、受部内側は滑らかに立ち上がり、底部の内面には指頭痕とナデがみられる。

類型3 粘質の胎土で、0.5mm～4mmの白色粒子やチャート粒、0.5mm程度の黒色粒子を含むものである。坏類については、器表面がなめらかなものとなめらかでないもの2つに細分が可能である。表面が平滑な坏身(630・634)は受部内面が緩やかな曲線を描いてなめらかに口縁部に至る傾向がある。いっぽう、表面がざらつく坏身(632・635・636・638)は受部内面が弱く屈曲するもしくは屈曲するものである。平滑度合が中間に位置する坏身(637)は受部内面が屈曲する。

類型4 粘質の胎土で、0.5mm～4mmの白色粒子や0.5mm程度の黒色粒子を含むもの(643・644・645・647・650・652・654)である。645・647・650・652は口縁部が直立する。壺・瓶類に偏っており、類型3に含まれるチャートが器面に現れていないものを分類している可能性があり、類型3と同じ產地の可能性を含むものである。

胎土5 非常になめらかな粘質の胎土で、0.5mmの白色粒子や黒色粒子を少量含むもので壺(642)があげられる。

胎土6 非常に緻密な粘質の胎土で、0.5mmの白色粒子を少量含むもので、断面色調は紫褐色を呈すものである。把手付碗(648)が例として挙げられる。

(2) 貯蔵具の多様性

初葬に伴い副葬されたと捉えられるII～III期の須恵器貯蔵具の特徴として、壺や壺・提瓶・横瓶の同器種における形態の多様性が挙げられる。壺は頸部高と胴部の器高に占める割合や口縁端部の形態、施文の有無と種類に差異がみられる。壺は645・646が類似しているが、口縁端部形態に差異が認められる。提瓶も同一時期に生産されたと見なせるものがあるが、口頸部の形態や把手の形態に差異があり、同一形態のものがない。647も壺だが、頸部形態や器面調整・焼成雰囲気が645・646とは明らかに異なる。横瓶も、口縁端部や成(整)形に差異が認められる。

(3) 坏類の多様性

中原4号墳からは9点と坏蓋3点の12個体が出土している。坏類は形態的特徴から同時期に生産されたと捉えられるが、焼成雰囲気や胎土、調整、細部形態の特徴には、差異が認められる。坏身と坏蓋の中に焼成時のセット関係を保ったまま持ち込まれたと評価できるものはない。坏蓋は、天井部と口縁部の境に稜や段をもつものと滑らかなものがあり、口縁端部は丸いもの(627)・内傾する凹面をもつもの(628)・口縁端部内面に凹線がみられるもの(629)があり、それぞれに形態的な特徴が異なる。

(4) 小結

中原4号墳に副葬された須恵器は、複数個体出土しているすべての器種において形態や胎土・焼成雰囲気の多様性が認められる。形態や產地の異なる須恵器を意図的に副葬していることがうかがえる。

胎土1 特徴：砂質 0.5mmの黒色・白色粒子 遺物 No.627・631
胎土2 特徴：粘質 0.5～3mmの白色・灰色粒子 遺物 No.633
胎土3 特徴：0.5～4mmの白色・灰色粒子、0.5mmの黒色粒子 遺物 No.628・629/630/634/640
胎土4 特徴：0.5～4mmの白色、0.5mmの黒色粒子 遺物 No.643・644・645・647・650・652・654
胎土5 特徴：粘質 0.5mmの白色・黒色粒子を少量含む 遺物 No.642
胎土6 特徴：粘質 0.5mmの白色粒子極少量含む 遺物 No.648

第222図 胎土の分類とその特徴

4 把手付碗の時期について

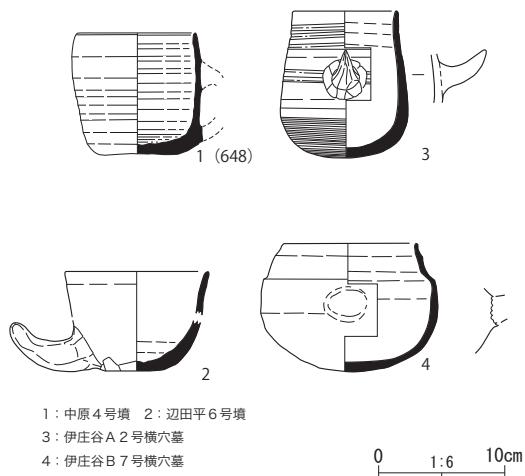
中原4号墳から出土した把手付碗は、陶質土器・初期須恵器もしくは在地産須恵器と考えられている（鈴木敏則2012）。陶質土器・初期須恵器と捉えた場合、把手は欠損しているものの100年以上、ほぼ完形の状態で伝世したといえる。いっぽう、在地で生産されたと捉えた場合、初期須恵器と見紛うほど忠実に把手付碗を生産したことの意義が課題となる。本節では県内の後期の古墳や横穴墓における把手付碗の出土事例と伝世の有無を踏まえ、中原4号墳出土の把手付碗の時期について考察を行う。

(1) 中原4号墳出土把手付碗の特徴

中原4号墳出土の把手付碗（648）は、円柱状の形態を呈し、高さ9.75cm、口径9.3cm、底径6.2cmである。口縁端部は丸く整形されている。底部外面は、ケズリとナデ調整が施され、共伴する他器種とは調整の雰囲気に大きな差異が認められる。把手は欠損しているが、器壁表面にのこる剥離の痕跡から環状の把手が付属したと考えられる。剥離部分や破断面の色調は赤褐色を呈している。初期須恵器に位置づけられる把手付碗に多くみられる隆帶や鋸い稜、波状文を用いた装飾などはみられない。

(2) 後期古墳から出土した把手付碗と伝世の様相

静岡県内の後期古墳や横穴墓から出土した全形をうかがい知ることのできる把手付碗を第253図に示した。浜松市の辺田平6号墳（2：MT15 窯式期・浜北市教委2000）、静岡市の伊庄谷横穴墓群A2号横穴墓（3：TK209 窯式期、静岡県教委1986）・B7号横穴墓（4：TK209 窯式期）の3例がある。把手が残存しているものは2と3で角状の把手が付属し、4も剥離の状況から



第223図 静岡県内出土の把手付碗

角状の把手が付くといえる。2～4は胎土の特徴や焼成雰囲気などから、在地窯で生産されたものと捉えられる。これら、在地窯で生産されたと評価できる把手付碗はいずれも角状の把手を備えている点が注目できる。

なお、県内で出土した陶質土器や初期須恵器は鈴木敏則により集成が行われている（鈴木2012）が、中原4号墳の把手付碗のように長期にわたる伝世が疑われるものは認められない。

(3) 小結

中原4号墳出土の把手付碗は、鈴木敏則が指摘するように形態が単純であり、共伴する須恵器の中に焼成雰囲気の類似するものがあることを鑑みると在地産の可能性を否定できない（鈴木2012）。しかし、県内の後期古墳等から出土した在地産の把手付碗に比べ、焼成雰囲気や調整の表情、環状の把手をもつなど初期須恵器の特徴を色濃く示す中原4号墳出土の把手付碗は、伝世品の可能性が高いと考えられる。

5 同時期の古墳に副葬された須恵器の組成

中原4号墳に副葬された須恵器は、供膳具（壺・碗類）3器種13個体、貯蔵具（壺・甕・瓶類）4器種16個体の計7器種29個体がみられる。

中原4号墳と富士市内におけるほぼ同時期（TK43～TK209 窯式期）の古墳に副葬された須恵器の器種構成と個体数を比較し、中原4号墳出土須恵器の器種構成の特徴を抽出する。

古墳から出土した須恵器の器種構成に着目すると1～3器種の古墳と5～8器種と多様な器種構成を示す古墳がある。中原4号墳と器種構成が類似する古墳として中里K-99号墳や船津L-154号墳が挙げられるが、貯蔵具の器種毎の個体数は1～3個体であり、中原4号墳の出土量と比較すると少ない。中原4号墳より器種数が多い古墳として8器種22個体を数える横沢古墳があるが、副葬の回数が多く、幅広い時期の須恵器が認められる。

中原4号墳から出土した須恵器は、器種が豊富で、一器種あたりの所有量が突出して多い点が特筆できる。墳丘や石室の規模をみると、中原4号墳よりも大型の古墳が多くみられる。中原4号墳における須恵器を豊富に所有する状況は、単に階層性を示すものではなく、被葬者の特徴を示すものと考えられる。

第23表 富士市内の古墳における須恵器の器種組成

古墳の名称	時期	形態	規模(m)	埋葬施設	出土須恵器										備考	文献			
					供膳具					貯蔵具									
					蓋坏(身)	蓋坏(蓋)	有蓋高坏	高坏(蓋)	無蓋高坏	把手付碗	櫛	壺	提瓶	フラスコ瓶	平瓶	横瓶	甕		
中原4号墳	TK43-209	円墳	11	横穴式石室	9	3				1	6	3	5			2		追葬有	本書
横沢古墳	TK43-217	円墳	16	横穴式石室	7	7	1+		1	1	1	1	1			1		追葬有	富士市教委1981
中里K-99号墳	TK43-209	円墳		横穴式石室	4	4					3	1	1		1				富士市教委1975
船津L-206号墳	TK209	円墳		横穴式石室			5+	1	1		2					1+		富士市教委2013	
船津L-123号墳	TK43-209	円墳	10	横穴式石室			2	1										船津桜沢A古墳 吉原市教委1985	
船津L-126号墳	TK43-209	円墳		横穴式石室						1	1	2						船津丸山古墳 吉原市教委1985	
船津L-202号墳	TK43-209	円墳	22.5	横穴式石室	5	1			1			1						船津寺ノ上1号墳 富士市教委1988	
谷津原2号墳	TK43-209	円墳		横穴式石室	5	3					2							富士川町教委1987	
谷津原6号墳	TK43-209	円墳	17	横穴式石室	2					1			1					静岡県埋文研2001	
谷津原8号墳	TK209			横穴式石室	2													静岡県埋文研2001	
中原3号墳	TK209	円墳	7.5	横穴式石室								1						本書	

6 中原4号墳に副葬された須恵器が示すこと

葬送儀礼の時期 中原4号墳に副葬された須恵器の時期は、初期須恵器の可能性があるもの、TK10 窯式期、TK43 窯式期、TK209 窯式期の4つの時期に生産されたものがある。初葬の時期はTK43 窯式併行期と捉えられ、TK209 窯式期併行期までに2回以上の追葬があったと想定できる。初葬時に用いられたと捉えられる櫛(640) や提瓶(649・651・653) には口縁部や底部に磨耗や欠損がみられ、古墳に副葬される前に使用されていたことがうかがえる。葬送儀礼に際し、新調されたものではなく、使用された器物が副葬品として納められたと考えられる。また、把手付碗は、初期須恵器である可能性が高く、生産から副葬までに100年以上の伝世期間を経て、初葬時に副葬されたとみられる。

須恵器の多様性 同一器種における形態差や胎土の違い、焼成雰囲気からは在地窯を中心に最低3箇所の生産地から搬入されたと捉えられる。坏類や櫛・壺・提瓶・横瓶で複数個体の副葬が認められるが、同一形態のものが多く、産地や操業段階の違いをうかがわせる。周辺の古墳では、貯蔵具の同一器種を中原4号墳ほど所有する事例がみられない。また、周辺の古墳から出土した須恵器は、色調や形態に統一感のあるものが多い。中原4号墳出土の須恵器は、他の古墳に比べて複数の産地からもたらされていることが特筆できる。

被葬者像 中原4号墳の被葬者は複数時期・複数産地の須恵器を入手・保有できる立場にあったと捉えられる。中原4号墳の築造時期は、駿河地域において須恵器生産が開始された時期にあたる。初葬の時期よりも100年以上古い(古く見える)把手付碗を所有や副葬された多様な須恵器の所有は、中原4号墳の被葬者が須恵器生産の導入と管理に指導力を発揮した人物(集団)であったことを示していると捉えてよいだろう。

引用・参考文献

- 川江秀孝 1992「須恵器の編年」『静岡県史資料編3考古三』静岡県
- 小池寛 2010「須恵器提瓶再考」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 後藤健一 1989「河西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 後藤健一 2000「古墳出土須恵器にみる地域流通の解体と一元化」『日本考古学』第9号 日本考古学協会
- 鈴木敏則 2012「静岡県下夕村遺跡出土の韓式系土器 - 県内の韓式系遺物と渡来人」『韓式系土器研究XII』韓式系土器研究会
- 鈴木敏則 2004「5章まとめ」『有玉古窯』浜松市教育委員会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 山田邦和 1998『須恵器生産の研究』学生社

資料文献

- 後藤守一・斎藤忠 1953『静岡賤機山古墳』静岡県教育委員会
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001『富士川SA関連遺跡』静岡県教育委員会 1986『伊庄谷横穴群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『衣原古墳群 衣原遺跡 衣原古窯跡群』
浜北市教育委員会 2000『内野古墳群』
富士川町教育委員会 1987『駿河妙見古墳群』
富士川町教育委員会 2008『谷津原古墳群』
富士市教育委員会 1975『中里大久保(K第95号)古墳』
富士市教育委員会 1981『西富士道路(富士地区)岳南広域都市計画道路田子臨海港線埋蔵文化財発掘調査報告書 横沢古墳 中原1号墳 伝法古墳群(A~E地区)天間地区』
富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』
富士市教育委員会 1998『寺ノ上古墳発掘調査報告書』
富士市教育委員会 1999『船津古墳群』
富士市教育委員会 2013『船津古墳群II』
吉原市教育委員会 1985『吉原市の古墳』